

白族民居・1

白族の民居は白壁に囲まれている。中には壁に絵が描いてある所もある。門構えの周囲に描かれたものが水墨画風なのに対し、イラスト風なのでこういった試みは最近のことだろう。先に紹介した昆明から大理までの車中で見た楚雄近辺の彝族の村でも白壁に恐竜や松茸のイラストが描かれていた。雲南省で今流行しているのかもしれない。

右の写真の家ではないが、ガイドに頼んで一軒の民家を見学させてもらった。



門を入ると、石畳の中庭を中心に木造二階建ての房で囲まれている。厳家で見たと照壁はない。資料に見る四合五天井といわれている形式である。左上の写真は門を入った所だが、中から見た門構えは外から見たより立派な造りになっていて、朱塗りで飾りも付いている。

中庭はひし形に石が敷かれていて、樹花を植えた鉢が置いてある。四面の建屋つなぎ目の二階部分に円筒形の特徴ある部屋が見える。その下に階段があるので左右に振り分ける踊り場風になっているのかもしれない。太い柱と棟木の造りは複雑な構造で頑丈そうだ。

かなりの年数が経っている様子で格子戸も破損している所が多く、瓦屋根には草が生えている。

この家の主が出てきて挨拶したが、いかにも人の良さそうな老夫婦であった。他に人が住んでいる気配がないので、おそらく老夫婦二人だけで生活しているのだろう。手入れをしていないのもうなずける。家族は都会に出ているのだろう。外壁がくずれている家も多く、全体的にこの村では過疎化が進行している印象を持った。



家も多く、全体的にこの村では過疎化が進行している印象を持った。



ここの家主の老夫婦が母屋からこざっぱりした服装で出てきて歓迎してくれた。左の写真の簾の先に石畳の土間がある。居間はその先にあるのだろう。挨拶を交わし、一緒に記念撮影を撮る。その間に庭の片隅の今は使われていない物置らしい場所の前で井戸を見つけた。

右の写真の手前にある四角い石に円筒形の穴が開いているのが井戸である。資料によると、桶に綱を付けて降ろし、手で引き上げるタイプの井戸とある。各戸に同じ形の井戸があるといわれている。

蒼山の伏流水が豊富な所なので、井戸は浅い

が、水汲みは結構重労働だったと思われる。

今は使われていない様だ。近くに蛇口の着いた屋外の流し台がある。(写真左の右端)

ここが厨房らしいので見学させてもらった。



厨房は思っていたより狭い。竈は煉瓦と石で組み立てた簡素なもので、まきを使用していた。鍋を

かけてある七輪は練炭だろう。老夫婦だけの生活で使っている。住空間を必要最小限にしている。そんな印象を持った。

屋敷の中まで招じ入れて見学させてもらったことに感謝を述べて外に出た。

